

非暴力による社会変革を目指すガンジー主義の建設運動

「ラマチャンドラン民衆福祉財団」の役割

R・S・ハリクマール

平良直訳

軍事主義と戦争が、「自由」や「国益の保護」という名のもと正当化されるようになってしまっていた時代において、マハトマ・ガンジーが現れたのは歴史的必然でした。国家のみならず個人においてさえ、暴力の正当化が受け入れられるようになっていたのです。トルストイなどは、このような増大する悪に強い反対の声をあげていました。

南アフリカからインドに戻ったガンジーは祖国インドの惨状を目の当たりにしました。人々の貧困はガンジーを困惑させるほど悲惨な状況でした。カースト制

度と不可触民の存在は、ガンジーに、南アフリカでの闘争をインドでも行うことを決意させたのです。

インドの惨状を嘆き、ガンジーは、カースト制度や不可触民であるかどうかを問わない統一的、自助的、自立的な自由社会の建設に着手しました。彼のビジョンは、宗教や政治経済によって境界線が設けられるものではなく、人々の生活全体が統合されたものでした。ガンジーは建設プログラムを実行にうつすなかで、国民的運動を展開しました。彼は、教育を受けた人材や指導者達を村落に配置し、村落産業プログラムを実

施しました。また彼はカーストと不可触民の制度を打破し、解放運動を展開しました。昔から続いている子供の結婚や様々な旧習を取り払い、女性を解放するなかで、女性を含めた大衆をサティアグラハ（真理の把持、不服従）に導きました。また彼が基礎教育と呼ぶ教育システムの改革にも着手しました。さらに、インドの公用語としてヒンディ語を位置づけるなど、様々なプログラムを実行し、徐々に自助的社會をつくり出していくなかで、人々を勇気づけていったのです。

「人間の生」を改革する運動

ガンジーの構想は、単にインド国内や国際政治における非暴力運動の分析や評価によって十全に語りうるものではありません。彼によって始められた改革は、新しい個人や新しい社會を創り出していくことを可能にする「人間の生」を、極めて深い次元で改革していく運動であり、そこにこの改革の重要性があったのです。それゆえ、これまでなされてきた他の革命とは異なり、改革それ自体の中に、変革のリズムと新しい社

會を創り出していく素地があったのです。

ガンジーは、単に理論のみに終始する哲学者ではありませんでした。彼は彼の思想を体系化しようとはしませんでしたし、ひとつの固定した社會体制をつくりだそうとする考えなどは全くなかったのです。彼は何よりも行動の人でした。物事の説明は、基本的な構想と信条を行動に移した後でなされました。

思想を体系化しようとしなかったとはいえ、実践的な改革を生活のあらゆる局面で実行するという彼の構想は統合的なものであったといえるでしょう。

マハトマ・ガンジーの教えと行動が国家再構築のあらゆる局面において実行されたことを、誰も忘れることはできないでしょう。マハトマ・ガンジーは、あらゆる面でインド人の生活に関与し、多くの力強い運動を巻き起こしました。彼は「総体的な改革」という挑戦的な構想を授けたのです。

暴力と非暴力との間の違いは、極めて実践的なものでした。我々はしばしば、非暴力を道徳的な理想主義と考えがちです。しかしながらガンジーにとって非暴

力とは、選択することができるとは、不可欠かつ効果的な行動だったのです。彼の人生哲学においては、「非暴力」と「行動」とは置き換えが可能な言葉だったのです。

ガンジーは空想の世界に生きていたわけではなく、インドの生活の厳しい現実のただ中に生きていました。それは、恐れ、貧困、不可触民を生み出すカースト制度、共同体同士の争い、宗教的狂信、言語的排他性、混沌とした教育など、タコの足が絡みつくように足かせとなっている厳しい現実でした。

建設プログラムこそ、そのような現実に対処するための彼の答えでした。プログラムのどれもが、一つの問題を解決することを目的としながらも、同時に他の多くの問題を大衆の力を呼び覚まして解決しようとするものだったのです。

「スモール・イズ・ビューティフル」

ガンジーの建設プログラムは、まだ達成されていないものもあります。とはいえ、インドの人々がガンジ

ーの精神を忘れてしまったわけではありません。偉大なるガンジーが組織した諸団体は、現在でもインドで機能しております。その諸機関のそれぞれは、多くの献身的な人々によって、建設プログラムの諸課題を実践しております。しかしながら、そのような諸機関が、ガンジーの非暴力主義を促進するために、ひとつに統合されるには至っておりません。

ラマチャンドラン博士は半世紀の間、ガンジーの建設プログラムに関わる運動に従事した後、生まれ故郷に帰ってきました。それは、小さな機関でこの建設的プログラムを始めるためでした。彼はそれまでタミールナドなどで、この建設プログラムを大きな規模で行っていました。彼は故郷で規模を小さくして、女性と子供のために事業を展開しようとした。シューマツハの有名な著書『スモール・イズ・ビューティフル』に触発されて、この事業を計画したのです。

ラマチャンドラン博士が友人達とこの計画について議論した折に、友人達は計画の成果がどれほど期待できるかについては懐疑的でした。博士は七七歳になっ

た一九八〇年、「ラマチャンドラン民衆福祉財団」を自宅に設立しました。博士は持てるものを全てを財団に捧げました。「肉体は古い弱りゆくが、わが精神はまだ若い」という言葉は、一九八〇年の開所式での宣言でありました。

ガンジーの精神を受け継ぐ

「ラマチャンドラン民衆福祉財団」

民衆福祉財団の目的は、女性と子供の福祉に基づいた、幸福な非暴力の村落共同体を建設することです。そこでは、女性が自立することを可能にする教育や、女性に社会や社会的規範を教えることによって、女性が、社会に目を向けるようにしていきました。女性達を雇うことができるように、彼は村落産業を始めました。また、そこでは、祈りの集会、教育集会、生活の一般知識の講義、街から離れたところでのボランティア事業のための訓練キャンプなど、村民が他の社会と交流する機会をもてる様々な訓練が施されています。ラマチャンドラン博士によって始められた事業は、

そのほかにも様々な形で展開しています。たとえば、非暴力による平和部隊拡大の運動、ラマチャンドラン図書館の運営、国内外に向けた非暴力に関する雑誌の刊行、大衆教育プログラムの推進、農場の経営、児童健康センターの運営、ラマチャンドラン・パブリック・スクールの開設などが主なものとしてあげられます。

このように、ガンジーの非暴力の思想と行動は、ラマチャンドラン博士によって始められた事業のなか展開されてきております。そしてマイティリ氏を中心として、様々な事業が引き継がれ現在に至っているのです。

(R・S・ハリクマール／

ラマチャンドラン民衆福祉財団事務局長)

(訳・たいら すなお／東洋哲学研究所研究員)

(本稿は、発表原稿を要約したものです)